

ペン俳句会 句会報（第三七〇号）

令和七年六月五日（木）

兼題『梅雨』、席題『立』

句会を、先月五月と同じ場所で開催。投句八名。
出席七名。（欠席は良知さん、ゆふきさん、金魚
姫さん）

中村 晃也

梅雨明けや鉄錆匂う造船所

海越しの立山連峰夏燕

エレベーター乗れば無口や夏帽子

これよりは北国街道立葵

真夜中の瀬戸おんおんと青葉汐

梅雨の窓軽きタッチのピアノ音

宮原 凧

ペダル漕ぐ立夏の風を翻へし

草木の満ちて明るき立夏かな

手を洗ふ水の弾ける夏はじめ

にはたづみ白雲よぎる梅雨晴れ間

まな板に花びら散らし桜鯛

土匂ひ草の匂ふて梅雨に入る

松田 一文字

初鯉潮の香の濃き漁師飯

雨あがるあやめの青をあざやかに

荒梅雨や雨垂れの音風の音
子供の日大道芸に立見の輪
立詰め of 夜行列車の帰省かな
生徒らの胸のリボンや更衣

安藤 晃二

梅雨晴れ間朴葉の新芽輝かす

石楠花の赤の軍団迫り来る

昼顔の天へ果敢や梅雨晴れ間

臺立つと三つ葉に小花瓶にさし

驟雨去りデッキの匂う立夏かな

むらさきの絞りみやびに花菖蒲

浜口 金魚姫

硝子鉢隔て金魚に見て見られ

短夜や空飛ぶ夢の着地点

柿落花身の置き所探す猫

梅雨最中球形鉢の大めだか

柿の花うつろうて早や実を結ぶ

爪立ちて花籠吊るす梅雨晴れ間

長尾 進一郎

六月の田んぼに映る空の青

水たたへ田植を待てる翁と田

並木道の輝く若葉朝の風

川風や片足立ちの鷺一羽

人影に水面へ寄り来金魚かな

睡蓮の花の白さや池の面

大津 そうかい

雑踏の街に気品の山法師

薫風や八千公前にときめける

山道に驚き合ひし吾と蜥蜴

萍（うきくさ）や立てぬ男の子となりにける

米櫃に米のある幸梅雨晴間

万緑や樹間行く人麗しき

西川 知世

風音の膨るる朝松葉散る

地藏堂の樋に緑青走り梅雨

ぬらぬらと浮かみ出づ鯉走り梅雨

梅雨の月家並の軒に影育て

暮れ方や水田の面の鎮もりぬ

梅雨めくや隣家の犬の甘え鳴き

次回は令和七年七月三日（木）。兼題は季語「蟬」
（中村晃也さん出題）、席題は西川知世さん出題
の「曲」です。

なお、今月は三十分早く終了したので、来月の席
題「曲」で、各自投句一句選句二句のミニ句会を
行つた。

追記

季語を学ぶ 初学にかえつて

西川 知世

「蟬」は、子どもの頃すごく身近かな生き物だった。女の子は捕虫網をもって虫籠を手に取り回ることとはあまりなかったが、夏の屋外では絶えず蟬の鳴き声がしていたし、授業の間に開け放った窓から蟬の声が聞こえていた。夏休み明けの宿題に蟬の標本を持って来る男の子たちは楽しそうだった。神戸の街なかで育った私には子どもの頃の郷愁を伴う生物ぐらいに過ぎなかった。

俳句を始めて、歳時記で蟬の句を知ることになる。まず、驚いたのは蟬は子供のものではないこと。男も女もこぞって俳句を作っていること。一週間ほどの命を生きて死ぬことからか、子供のころの自分との隔たりをみつめることになるからか、蟬は大人の感慨を託せる大きな季語であつた。はかないのち、蟬時雨の静かさなどが焦点になると手に馴染んだ平井照敏の歳時記にある。鳴くのは雄だけで、鳴かない雌は唾蟬だそう。

みんなの声の円盤廻り出す
蟬の穴京に七つの出入口
油蟬人を柱と数えし日
有働 亨
山尾慈子
大熊久子

閑さや岩にしみ入る蟬の声 芭蕉
蟬鳴けり泉湧くより静かにて 水原秋櫻子
臥して聞けば初蟬海に沁みわたる 山口誓子
唾蟬もなく蟬ほどはゐるならむ 山口青邨
子を殴ちしながき一瞬天の蟬 秋元不死男
身に貯へん全山の蟬の声 西東三鬼
女ざかりといふ語かなしや油蟬 桂 信子
蟬時雨子は担送車に追ひつけず 石橋秀野
ころりころりと蟬が死にをり摩崖仏 野澤節子
油蟬ねぢゆるみきて鳴きやみぬ 鈴木青園